

くらづかこふん
蔵塚古墳
ふんきゆう ちょうき
墳丘の調査



1997. 9. 27



(財)大阪府文化財調査研究センター

蔵塚古墳の調査

蔵塚古墳は今回の調査で新たに発見された前方後円墳
 築造されたことがわかっています。この古墳は前方部が
 臺と考えられる白髪山古墳（伝清寧天皇陵）と似ており、
 この蔵塚古墳は飛鳥川流域では唯一の前方後円墳であり
 飛鳥戸造氏との関連が考えられるなど、非常に重要な意



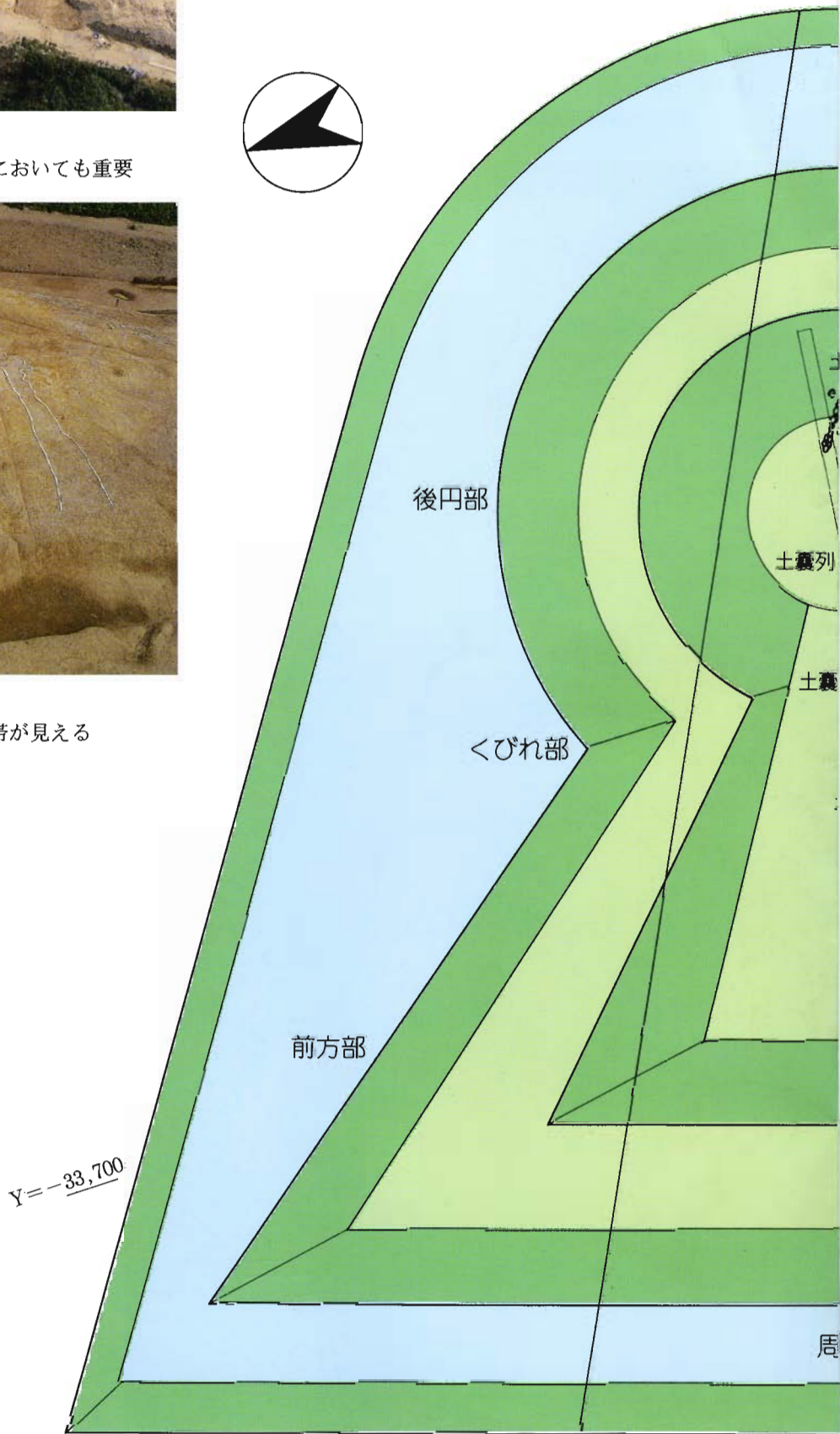
▲空から見た墳丘の土囊（どのう）列
 検出された土囊列は古墳築造過程を知る上においても重要



▲後円部の土囊（どのう）列検出状況
 後円部の中心から放射状にのびる黒い土の帯が見える



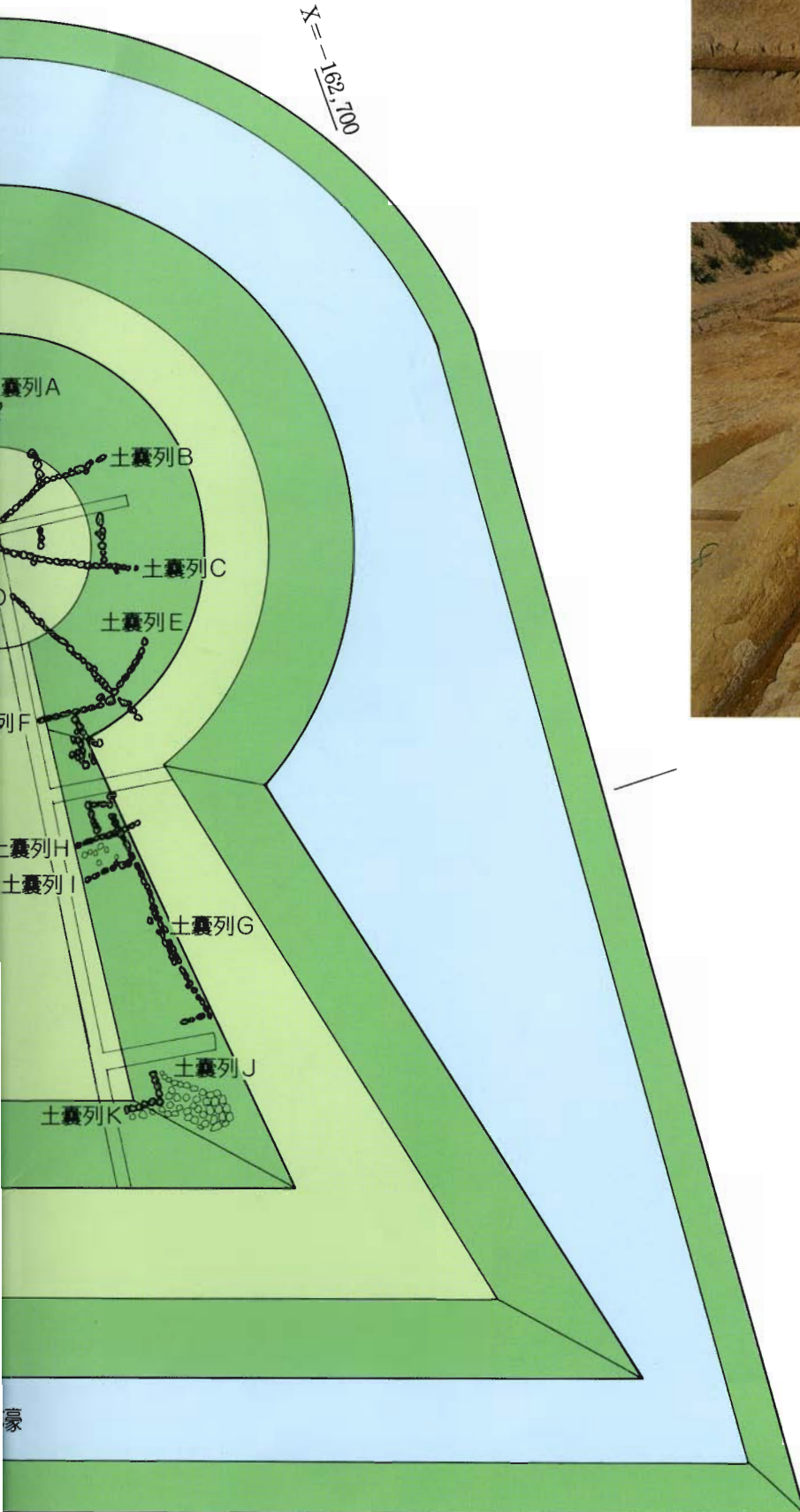
▲土囊（どのう）列Cの検出状況
 40cm×30cm前後の四角い土のかたまりが並ぶ



くらづかこふんのちょうさ

あり、これまでの調査で古墳時代後期（6世紀中頃）に大きく開きわめて特徴的な形をしており、同時期の大王墓の大きさはほぼ2分の1の規模で築造されています。対岸に展開する飛鳥千塚古墳群や当地を本拠地とした古墳をもつ古墳であるといえます。

◀墳丘主軸



▲墳丘と土囊（どのう）列 模式図（1/300）

墳丘の段築については詳細な検討を経たものではないので注意



▲後円部の土囊（どのう）列

後円部をほぼ正確に8等分していたと考えられる



▲前方部の土囊（どのう）列

直線的にのびる土囊列は前方部側縁にほぼ平行する



▲土囊（どのう）列D

この土囊列を延長するとくびれ部にあたる

蔵塚古墳の墳丘は埋葬施設とともに上部が大きく削平されていましたが、南半部では盛土が2 m近く残っていました。この盛土を丁寧に掘り下げていくと幅約30 cmの黒い土の帯が規則性をもって見つかりました。この黒い土を詳細に観察すると、長さが40 cm、幅30 cm、厚さ20 cm前後の土のかたまりが並んでいることが判明し、一部では4段以上も重なっている状況も確認されます。個々の土のかたまりは形や積み重なった状況などから袋に土を詰め込んだ土嚢である可能性が高く、それを裏付けるための科学的な分析なども行う予定です。

なお、この土嚢列は後円部では若干のずれはあるものの、古墳の主軸を基準として8等分していた可能性が高く、一部では放射状にのびる土嚢列をつなぐ土嚢列E・Fも残っていました。これは後円部を築造する過程においては八角形で墳丘が造成されていた可能性を示唆するものといえます。

また、前方部で見つかった土嚢列Gは前方部側縁にほぼ平行し、これを東側に延長するとほぼ正確に後円部の中心にむかい、上端部の高さもほぼそろっていることがうかがわれます。この土嚢列は古墳の基本的な設計線とも関連するもので、2段目の墳丘の下端に対応するものと考えられます。

今回、墳丘から見つかった土嚢列は設計通りに土を盛り上げていくための目印であるとともに盛土の流失をふせぐ役割をもち、さらには土嚢列に囲まれた個々のブロックが作業上の一つの単位となっていたといえます。

古墳でも前方後円墳の墳丘を平面的に調査することはごく希であり、今回の調査は巨大な前方後円墳の築造に代表される古墳時代の土木技術が非常に高度なレベルであったことを具体的に裏付けることとなりました。



▲土嚢（どのう）列Kの検出状況と断面
旧地表面の直上に土嚢を2段前後、並べて積み上げる

▲古墳の下層（旧地表面）から出土した弥生土器
このほか、土嚢内の土から石鏃も出土している



▲後円部の盛土
黒い土と黄色い土を交互に盛って、丁寧に積み上げる

▲前方部の盛土
盛土の単位は非常に粗く、前方部は後円部に遅れてつくられる